

ギスたれ考

— 中村地平と宮崎 —

矢 口 裕 康

An Analysis of the Local Mentality through the Dialect Word "Gisutare"

: Chihei Nakamura and Miyazaki

Hiroyasu YAGUCHI

私にとっての宮崎県はと考える時、「ギスたれ」を想起し、また宮崎県人はと考える時、作家中村地平を想起する。

中村地平は明治四十一年二月七日宮崎市で生まれ、一時東京で生活し太宰治・小山祐士とともに井伏鱒二門下の三羽鳥とまで称され、昭和十九年三月疎開のため宮崎へともどり死んでいった作家である。地平は、南国宮崎の出身であるにもかかわらず、より南方志向を試みた。そのことは大正十五年十八歳の四月、台灣總督府立台北高等学校に入学という形で現実化する。台灣を素材とした作品もあるが、「南方への船」(昭和十四年三月)の中で台灣ゆきについて「九州の中學を卒業すると僕は台灣にある高等学校を受けた。佐藤春夫氏の影響などで南方に憧憬する気持ちが強かったためである」と述べている。切掛けはどうであれ、より南方的なものを志向したのである。それは、後年南方的文学の樹立(昭和十五年九月「新しきの方向」)を提示するという、地平三十二歳の考えに至る。

しかし、地平はこの提示を実現できなかった。その一因には、宮崎県人の血が流れていた作家であったことがある。宮崎県人と一口にいっても、小藩分立が集合した結果としての宮崎県であってみれば、一概に宮崎県人とはいいくらいかもしれないが、行政区画としての県であろうと、それが一群化されると、そこになんらかの意識が発生してくるのも事実であろう。

共通意識を県民性におきかえてみると、祖父江孝男は『県民性——文化人類学的考察——』の中で、「同じ九州でも、宮崎となると、他の諸県とはどうもいささか違うようだ。ここでは積極性とか熱情性といった面が姿を消してしまって、『消極性』という特質が、だれによってもからず指摘されている。一方ではノンビリしているという特質もあるから、この点は長崎あたりに似てくるのだが、九州にしては珍しく『弱氣』とか『怠惰』などともいわれている。それというのも、長いこと隔離されて孤立し、文化的にも低いところにおかれていたからだと解釈されるが、文化的に遅れていても、東北のようにそれを気にして、劣等意識をもつことはないようである」と、宮崎県人の県民性について指摘している。「積極性・ノンビリ・弱氣・怠惰」、方言をかりれば「のさん」「よだきい」ということであろうか。そして、東北地方とは違い劣等意識をもつことはないともしている。しかし、このような指摘もふまえた上で、「ギスたれ」についても検討してみると、より宮崎県人の姿を描きだせる。

地平も「ギスたれ」について、自著『日向』の中で指摘している。『日向』は、戦前（昭和十九年六月十五日）小山書店の新風土記叢書五として刊行されたものである。この叢書の一冊には、第七として太宰治の『津軽』も含まれたものである。その昭和十九年刊行本が、戦後角川文庫本（昭和三十二年七月三十日）の一冊として刊行される。地平三十六歳の時の著作が、四十九歳の時再刊されたことになる。作家地平の弟子の一人久保輝巳の言（以下、久保の言は昭和五十八年九月十四日 二十五日聞き書きによる）によれば、「『日向』が、角川文庫本になることをひどく喜んでいた」というものである。昭和十九年、三十二年と、そこには時代の変化、地平自身の意識もあり、内容面においても改訂され、かなりの手がいれられている。この「ぎすたれ」の部分の両書の比較、『宮崎県方言辞典』（原田章之進編 昭和五十四年刊）における記述、昭和五十七、八年『朝日新聞』連載の「新人国記82」「新人国記 続」の記述をも検討の材料とし、ぎすたれと宮崎県人の意識の変化を考えてみたい。

例示 1

昭和十九年に地平が書いた一文に、角川文庫本を重ねてみると、「旧幕時代は、隔絶された山間の小藩の中に閉ぢこめられて、海外は勿論のこと、中央の空気にさへ触れることができ少なかった。そして、皇祖発祥の靈地といふ父祖の地への自尊に、自ら満足してゐた。温暖な気候のなかに眼識の狭い、退黒的で、消極的な性格を形づくってしまったのである。宮崎地方には『ギスを出す』といふ言葉がある。出しゃばったり、人眼につく振舞ひをしたり、はつたりをかけたりすること〔の方言〕である。日向人は実にこのギスを出すことを嫌ふ。他人が積極的な意図をもって、なにごとかに動かうとすると、日向人は忽ちこの言葉~~x~~を〔で〕もって牽制してしまふ。~~x~~時には相手がいい意味の建設的意志をもって〔動こうとして〕ゐる時でさへさうである。そして、また牽制された側が、この言葉に~~x~~もろいことは〔たいしてもろく無抵抗であるのは〕、滑稽なくらゐである。〔『ギスをだすな』といわれれば、相手は無条件に、だそうとした首をひっこめる〕日向人にとって、ギスをだすことは、~~x~~唯一無二の〔たいへんな〕悪徳なのであるが、恐らくこれくらゐ、消極的調和をやぶられることを~~x~~極端に恐れる日向人の退黒性・守旧性も、端的に現す例証はあるまい。自己が刺戟されることを恐れると同時に、他人を刺戟することを嫌ふ〔このような〕性格が指導的な立場に立ち得る筈がない。日向に指導的人物が出なかつたのは理由のないことではないのである。環境のせゐで、日向に中央的人物が輩出しなかつたといふことは、然し、それだけで日向人の本質的な価値を決めることにはならない。日向土着の人間をひとりひとり親しく見れば、誰にでも容易にわかるように、それらの中には実に素朴で、善良で、愛すべき人が多い。風景、気候が温和で、素直なのに同じく~~x~~實に日向の人間~~x~~は〔もまた〕穏かで素直なのである。」（~~x~~——は角川文庫中削除部分、〔 〕は改訂部分）と、小山書店本の域をでておらず、昭和三十二年角川文庫本においては、大幅な改訂がなされていない。

例示 2

また『宮崎県方言辞典』においても、「ぎすたれ、調子づいて一人でしゃべりたてたりする者。へりくつをよく言う者→ぎす。宮崎市」とし、「ぎす」の項をみると二つの意味あいがあり、その一つとして「①出しゃばったり、人目につく振舞いをしたり、はつたりをかけたりすること」として、例示として中村地平の『日向』をあげている。これらをみると、「ぎすをだす」「ぎすたれ」という方言については、宮崎県人の意識の中に生きつづけていたようである。今まで「ぎすをだ

す」という表現を、その意味あいから問題としてきたが、『朝日新聞』の連載記事中に、期せずして県内外の人から、同種の発言がなされている。

例示 3

その発言とは

- 「新人国記82・宮崎県③」(410回、昭和五十七年十二月十日掲載) 生活と教育の闘い 五十五年の国民審査で、県内の「×印票」は裁判官四人の中で谷口(えびの市生まれ、最高裁判事、谷口正孝、六十五歳)が一番多かった。「郷里に全く信用がない。全国でも珍しいケース。それだけ県民に批判精神がおう盛というなら結構だが、実は足を引っ張る県民性の現れでして……」(=は筆者による)

と、えびの市生まれの宮崎県人谷口が指摘したのと同種の発言を、えびの市在住・北九州市生まれの江頭が、次のように述べている。

- 「新人国記 続、ふるさと群像⑦」(昭和五十八年三月三日掲載) 旅情をありがとう 江頭(えびの市白鳥在住、えびの山荘経営、江頭一、五十三歳)は北九州市生まれ。十三年前、えびのの自然に魅せられて一家四人で移り住む。「今も、よそもの扱い、よくいじめられます。ここには足を引っ張る風土があるみたいです。」

そして、東京都調布市在住の洋画家、柳田義男(五十六歳)も、次のように述べる。

- 「新人国記 続、ふるさと群像⑬」(昭和五十八年掲載) 「県民性」への痛烈な批判つまり甘え根性が強い。人頼み、依頼心が強い。県人を長い間みてきてしみじみ感じたことは「人前に出るのがきらいで引っ込み思案。顕示欲は強いが恥ずかしがり屋で、そねみ、ねたみが強い。協力するよりも足を引っ張る傾向が強い。これが身についた県民性、習性だと思う」

三氏の発言を重視するなら、以前として「ギスを出す」ことを拒否する傾向が残っているといえよう。このことを作家活動ということから考えてみると、創作とは、個人が自室で一人で考え執筆していく個室の産物である。そこには持続力と粘り強さが大きな要因となろう。とすれば、その面の気質に欠ける宮崎県人にとっては、不向きな活動の一つとなる。その結果が、宮崎県から一人の芥川賞・直木賞作家も輩出できぬことにつながらないか。このような風土の中での、地平の作家活動であったことを考えれば、昭和十九年以前と以後の作家としての活動のわかれ目が出現することも理解できよう。

「ギスをだす」ことに対して、では中村地平はどうであったかと、観点を移してみると、どうも本人自身は、「ギスをだす」傾向をもちながら、まわりの厚い県民総体の意識の中へとけこみ、かつ埋没し、むしろ「ギスをだす」者に対して敵対者になってしまったように思えてならない。それは、小説を書く上では先輩である地平が、後進の同じような道を歩む者に対する対応にみられる。地平は、「宮崎のホープ」(昭和三十四年、『毎日新聞』連載)という新聞記事に対し、久保輝巳を推薦しているが、その推薦者の言葉として「久保君と語っているとボクは何かのどにつかえるような気がする。久保君は実務家として切れるし、作家としても素質のある人だが、その思想なり、人生観なりにボクは何か異物観めたものを感じるのだ。いつか久保君の小説がドギツすぎて問題になったことがある。しかし新しい時代というものは古い時代にたいしては常にドギツく、異物観を与える。そういう意味において次代の作家久保君をボクは高く評価する」と述べている。

ここにいう異物観と表現されているものは、作家として素質があり実務家としても切れる久保の存在が、「ギスをだす」ものとして感じられた結果ではないか。そして、一つの行動として久保の小説「出会い」を、黒木淳吉、黒木清次、上原和の地平以外の本作品を読んだ者が認めたにもかかわらず、性描写のどぎつさを理由に認めないとしたのである。この性描写について、久保によれば「セックスの生の部分はリアルに書くものではないという地平としての基本姿勢があった」ということもあるが、地平の理由の一つとしては、地平勤める所の職場の者が、このようなものを書いたという形で、婦人団体やPTAからの反応がおこることへの対処とも考えられる。つまりPTAママ的倫理感への配慮ともとれるが、作家地平が、不得意の部分と思われる性描写を巧みに書かれてしまったことへの対処ともとれる。すると、「ギスをだす」ことを嫌がる典型的な宮崎県人としての地平をみるとできよう。

もしという話は存在しないが、地平がもし東京で作家活動を続行するという状況が可能であったなら、この「ギスをだす」地平を伸ばし、「南方的文学」を樹立した作家としての評価をえていたかもしれない。地平は、いみじくも昭和十五年八月の「東京の町」という一文の中で、「それはそれとして、伊藤氏（伊藤整のこと。雑誌『新風』創刊号「ロマネスク論議」中に述べていることを指す）のこれらの言葉は、僕にはたいへん興味があった。都会と田舎と、環境と創作衝動との関係が、僕の場合はまったく逆だからである。結論を先に簡単に言ってしまうと、田舎に在るとき僕は創作衝動を喪ってしまう。ぼんやりしてしまうのである。文学的な興奮や、興味は辺りの自然になだめられてしまう。悲しみとか、怒りとか、憂鬱というものは、明るい太陽や、青々とした杉樹立や、むんむんとする草いきれや、眩しい海の色に吸いとられる。そこではひとりでに無為と無念との生活におちこんでしまう」と述べている。

このことは、即、戦後の地平の作家活動を暗示しているように思える。また同種の思いを、昭和二十九年一月「地方作家の悲しみ」十二月「再び地方作家について」にも述べている。地平は、つづけて「埃っぽい、非文化的な東京の町なかに体をなげだして、田舎に郷愁を感じていることが、結局いちばん自分の仕事をおしすすめてゆくことになることを自覚したのである」という。地平にとっての作家と創作環境の関係を定義づけている。すると、これを昭和十五年地平が作家として油ののりきった頃に書かれた本音として受け取ると、昭和十九年三月郷里の実家へと疎開して以降の地平は、「東京の町」中、前者のことをより深化していったのである。そこに戦前の創作活動の勢いがみられないのも、当然の帰結といえる。

もし東京にての作家活動が可能であったならば、地平自身の「ギス」を出しつづけ、作家中村地平の唱える「南方的文学」の樹立は実現したかもしれない。このことは、父親が創業した宮崎相互銀行社長へと就任し、実業家中村地平として歩みだした途端における挫折を述べた一文「ある職場での経験」（昭和三十八年一月『新潮』）や、前年の十一月『文芸春秋』「社長稼業十カ月」の中でのつぶやきにも表われている。地平にとっては、実業家として生きていく道も断たれたのである。

晩年の中村地平の行動を、久保の言により三つほどまとめてみると、そこには作家地平としてのギスを出しきれなかった姿をみてとれる。

① 志賀直哉の来宮

『中村地平全集』第三巻「中村地平年譜」（黒木清次・久保輝巳編）によれば、「昭和三十一年、四十八歳、十月、志賀直哉夫妻令嬢貴美子さん同伴で来宮、日南海岸などを案内し、青島迎賓館に宿泊、歓談する」とある。久保は、その時の様子を次のように回想する。「地平さんは、志賀の乗っている飛行機がおくれ、イライラしているので、山の上に機影がみえてくると、それを追いずうっと立って着くのを待っていた。着く前、新聞記者から対談記事でもと言われたのを拒否し、その日はそのまま、青島の県のもっている宿を貸し切り。二階に志賀夫婦、娘、隣の部屋に中村地平。一階に黒木淳吉、久保の二人。宿へ行く時も志賀らに一台、二台目に地平、黒木、久保の三人という配慮。地平は、その晩志賀の隣りの部屋に寝るので、ねむれないであろうと一冊の本を持ってきて、その本が中央公論新人賞（第一回）の『檜山節考』。次の朝、階下の二人を起こしに来、青島近くまで砂浜を歩き散歩したが、非常な興奮で、その興奮は、自分より年下の作家に負けたという感もあるが、かなり高い評価をしていた」

深沢七郎は、大正三年一月二十九日生まれで、たしかに地平にとって年下の作家である。そして『檜山節考』は、日本の昔話の中の一つ俗にいう「姥捨山」（『日本昔話大成』昔話の型・番号523「親棄山」）を素材として作品化したものである。地平も、前年三月、河童を導入した作品「山の中の古い池」を発表している。この作品は地方の民話からも題材をとり、地方主義文学を志す地平としての意欲作として書かれた。しかし文壇においては痛烈な批判を受けてしまったのである。このことも考えあわせれば、興奮ぶりも納得がゆく。そして、久保にとっては同じ月に二つの作品（昭和三十二年二月群像「山の中の古い池」世界「告別式前後」のこと）を中央誌に発表できるほどの仕事をしている作家としての魅力をもつ人が館長、ということでの県立図書館への就職であったが、日常生活の仕事ぶり他からみても小説家とは思えるところがなかったところでの一件である。「地平さんの文学者らしい感じをはじめてみた」と思えるくらいの衝撃を感じた出来事であったと、久保が語るくらいの興奮ぶりであったらしい。しかし、地平が、師と仰ぐ志賀の来宮および深沢七郎の出現をもってしても、創作活動への活力は生じることはなく、むしろこういう作品が出てきたのではどうしようもないと思うようになったと感じられる。

その後、昭和三十三年十月県立図書館退職以降の二つのエピソードもそのことを裏付けるかのようである。

② 阿川弘之の来宮

その一つは阿川弘之の来宮である。

「阿川は志賀の弟子で、志賀からの言伝もあるので会いたいとの電話を、久保がかけると、先ず奥さんが出て地平にかわると、久保に“今、バリバリ書いている作家に会えるか”と言われ、久保は阿川に対してそうではない形で断わり、結局会わなかつた」ということである。

③ 檀一雄の来宮

そして、もう一つは、皆美社より出版された『中村地平全集』全三巻実現の大きな力となった、檀一雄来宮のさいのエピソードである。

「日高一館長の時(中村地平後任の県立図書館長)，檀が来宮しスケジュールの打合せをしていると，檀は“便所へゆく”と言ったままいなくなってしまった。いつまでたっても帰ってこないので、便所や館内をくまなく捜してもおらず、外を捜すと、宮崎小学校の横の道に入った所の、職員が昼めしを食いにゆくような店で、日本酒を飲んでいた。そのへんに行商に来ていた人から魚を買い、それを肴に飲んでいた。久保が、そこから地平さんの所へ電話をし、奥さんが出、うちの玄関までいって会いたい旨伝えたが会えなかった。その後四日ぐらい宮崎観光ホテルのうしろにある旅館に宿泊していたが、結局一度も会えずという形になってしまった」

阿川弘之にせよ、檀一雄にせよ、同じ文筆の世界にくらす者に会いたくないという心理状況に、その当時の地平のおかれていた立場がわかる。昭和三十七年三月健康上の理由により宮崎相互銀行辞任、昭和三十八年二月二十六日、五十五歳の若さで地平はなくなる。作家中村地平のうめきが聞こえてくるような晩年、そして死期である。

宮崎に住む私たちは、今こそ地平の以上のようなうめきを真摯に受けとめ、明日の県の姿、県民像を考える糧としなくてはならないだろう。どんな社会でもそうだが、すべてのものが「ギスをだす」傾向、存在となりえるものではない。その「ギスを出す」存在の活力を活かしきれない所に、現在の宮崎県の姿があるようと思えてならない。(1987年9月30日受理)